

はじめに

愛知県美術館では、木村定三コレクションの受贈以来、継続して調査研究を行い、その成果を展示公開に反映させるとともに『木村定三コレクション研究紀要』、『木村定三コレクション研究報告書』をはじめ、図録や目録などの刊行物で紹介に努めてきました。このうち、研究紀要について、今年度から開館以来刊行を続けている『愛知県美術館研究紀要』と合体させ『愛知県美術館研究紀要 木村定三コレクション編』として、新たなスタートを切ることになりました。

木村定三コレクションの内、333件は、平成13-14（2001-02）年に生前の木村定三氏から、直接ご寄贈いただいたものです。今回、この研究紀要木村定三コレクション編で取り上げております《不動明王立像》（木村定三コレクションJS2002-006）もその中の1点で、平成14年に他3点の仏像とともに受贈いたしました。本号は、近年の修理によって得られた新しい知見を含め、この像についての研究成果を報告いたします。

搬入時、この不動明王像をはじめとするこれらの仏像からは多量の虫糞が確認されたため、内部の虫損状態の確認、および学術調査を兼ね、X線透過撮影をその年度末に行ないました。その時点で、この不動明王立像の体内に、何か「札様」のものが納入されているということが判明しましたが、その時点では、それが何であるかを確認することはできませんでした。平成22年、表面の剥離の進行、手首の接続部分の損傷、脚部の柄（ほぞ）に狂いが生じ台座との接合が不安定であること、以上の三つの理由から修理を決定しました。当初の方針としては、無理な解体修理は行なわず、現在必要とする最低限の保存処置のみというものでしたが、修理中、首の接続部分にもゆるみがあり危険な状態であるという判断があり、首から上の解体をすることになりました。その時、首の開口部から、胴の内部背面側に文書が貼り付けられていることが判明しました。また開口部ができたことで、内部の清掃をすることが決まり、そのことにより、大量の虫糞・塵埃とともに、主要4片の仏画断片が内部から取り出されました。

本書の刊行にあたり、不動明王立像および過去の所有者に関する調査研究結果をご寄稿いただいた浅湫毅氏、胎内から発見されました由来書および如来形画像断片について、綿密な調査結果をご寄稿いただきました大原嘉豊氏、またその如来形画像断片に装演技術史の側面から、貴重な知見をご寄稿いただきました岡泰央氏に深く感謝致します。また重要な基礎資料となるX線透過撮影でご協力頂いた元興寺文化財研究所、修理報告の掲載を承諾して下さった財団法人美術院、岡墨光堂の皆様、また参考資料として図版掲載を快くご許可下さいました禅林寺様に、心より感謝いたします。

愛知県美術館館長 村田真宏